

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	------------

氏 名 王 勝群
論文題目

田村俊子と張愛玲の比較文学的研究
——女性作家が〈見せる〉こと——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田祐子
委員	名古屋大学	教授	加藤 國安
委員	神戸大学	准教授	濱田 麻矢

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、日本と中国の二人の女性作家、田村俊子と張愛玲を取り上げ、最初期の職業的女性作家という歴史的立場、作家の視覚イメージとの相関関係、各作品における〈新しい女〉／〈新女性〉の形象、女性のセクシュアリティと両性関係などについて比較考察を行ったものである。序章・終章を別に全7章よりなり、Ⅰ部（1章、2章）、Ⅱ部（3章から5章）、Ⅲ部（6章、7章）で構成されている。この中には、学術雑誌に掲載された審査付き論文が5篇含まれている。

第Ⅰ部「女性作家のイメージ形成——化粧／衣服というメタファー」では、全盛期の田村俊子と張愛玲が女性作家としての認知される際の状況と軌轢を、それぞれ厚化粧／奇装異服という視覚表象とのかかわりに注目しながら論じている。第1章「厚化粧」の田村俊子——つくる／つくられる女作者——、および第2章「奇装衣服」の張愛玲——語る／語られる女性作家——においては、男性中心の文壇において、田村俊子と張愛玲が化粧と衣服による扮装を行い、またそれを言語的に表象して、女性性を前面に押し出して「女作者」「女性作家」を自ら標榜したことを跡づけた。

第Ⅱ部「〈新しい女／新女性〉への眼差し」は、第3章「家出」をしない〈新しい女〉——田村俊子「あきらめ」論——、第4章「〈新しい女〉と揺らぐ「自我」——田村俊子「炮烙の刑」論——、第5章「記憶・空間・新女性——張愛玲「五四遺事」論——」からなる。いずれも作品における〈新しい女〉／〈新女性〉の形象について考察を行うことが主眼となっている。第3章では、女主人公・富枝の選択に注目し、彼女が〈女戸主〉になることの可能性と困難を追究し、「家出」をしない〈新しい女〉としての造形を論じた。第4章では、女主人公・龍子をめぐる同時代の評価軸の揺れに着目し、平塚らいてうらが主張した〈新しい女〉の理想に収まらない龍子の「自我」の両面性を論じた。第5章では、張愛玲の五四運動観の確認、中国のメタファーとしての西湖の空間像の分析を行った上で、五四運動期の新女性の内面の空虚さ、主体性の希薄さを洞察した張愛玲の新女性観を考察した。

第Ⅲ部「移動の空間、不確かな〈眼〉、引き裂かれた性」は、第6章「彩られた空間——田村俊子「生血」の視覚世界——」、第7章「揺らめく空間、自己分裂の舞台——張愛玲「赤薔薇・白薔薇」論——」からなる。両作品の空間と色彩の表現に注目しながら、性役割とジェンダー規範、それらに縛られた女性と男性の自我、身体、欲望、セクシュアリティの様相を論じた。

終章では、全体の総括を行いつつ、彼女たちの模索した新たな表現の可能性を評価しながら、見る／見られるという視線の応答的構造からはみ出た〈見せる〉女性作家の多義性を論じている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

本論文が対象とした田村俊子、張愛玲は、日本文学研究、中国文学研究において、それぞれ近年注目を集める女性作家である。彼女たちが生きた時代は、両国における職業的女性作家の出発期にあたり、その先陣を切った一人が田村俊子であり、張愛玲であった。本論文は、こうした共通点に着目し、日中の女性作家の軌跡と作品を比較文学的に考察したものである。

本論文のもっとも優れた達成は、従来対照して考察されることのなかった二人の女性作家を、適切な論点を定めながら比較分析することにより、相互の文学的な共通性のみならず、作家としての振るまい方の共通性、そして社会的な状況の考察にまで及んだ点にあると言えるだろう。本論文が用意した、〈新しい女〉〈新女性〉、化粧と奇装異服、色彩と空間の表現、支配的なジェンダー規範に対する闘争という観点は、いずれも興味深いものであり、両者の共通性を論じるのに説得的であったと評価できよう。

また、個々の作品分析の緻密さについても、高い評価が与えられる。数多く書かれてきた先行研究を着実にふまえながら、丁寧に作品の表現と向き合い、新しい読みを提出しようと試みた。とりわけ、第6章の田村俊子「生き血」論、第7章の張愛玲「赤薔薇・白薔薇」論については、審査員からの評価を得るところとなった。第6章、第7章ともに色彩の表現と、空間の表現に注目し、その組み合わせを読み解くことによって、作品の構造を明らかにする興味深い達成であった。

さらに、作家と作品の背景となった社会的状況や論争、出来事、制度などに適切な目配りを行ったことも、本論文の厚みを増すことにつながっている。日中両国の〈新しい女〉〈新女性〉についての論議、作品や作家イメージの掲載媒体、「女戸主」という選択肢、五四運動とその記憶など、それぞれの要素について十分な調査分析を行っており、単なる作品論の域を超えている。

ただし、日中の作家を対照するという本研究のもくろみは、困難さも同時に抱えている。共通点の分析を重視したために、差異の考察をうまく織り込めなかったこと、田村俊子が主軸となっており、張愛玲がその比較対象の位置に置かれる傾向があったこと、包括的な結論を目指すことが抽象度の目だつ結論につながりがちだったことなどが指摘された。

とはいえ、いずれも本研究の野心的な挑戦の裏表というべき欠点であり、質疑応答の中でも著者の理解がこれらの点に及んでいることも確認できた。今後より丁寧な論述や調査が期待されるところではあるものの、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。